

ピーマン接木苗による土壌病害軽減効果の実証

但馬地域は「たじまピーマン」のブランドで栽培を推進しているが、青枯病による減収が問題になっている。そこで、近年開発された多収性の青枯病抵抗性台木の活用で、病害抵抗性と収量性が両立できることを実証した。

取組の背景

但馬地域は近畿最大の夏秋ピーマン産地で、「たじまピーマン」のブランドで栽培農家178戸、面積11.5haの規模で栽培され、兵庫県認証食品に認証されている。近年、青枯病の発生が問題となっており、その対策として抵抗性台木を用いた接木苗の利用が成果を上げている。しかし、実生苗に比べて収量が低いため、農家には浸透していなかった。そこで、収量性が改善された抵抗性台木品種の導入による収量向上を実証した。

実証内容及び結果

以下の実証区を設定し、5月14日に10aあたり900本定植した。6～9月に病害調査、収量調査、生育調査を行った。

- ① 台木「タッグマッチ」+穂木「京ひかり」
- ② 台木「台パワーZ」+穂木「京ひかり」
- ③ 実生「京ひかり」

表 萎凋株・枯死株率 (%)

	7/12	8/23	9/28
タッグマッチ	0	0	1
台パワーZ	0	0	1
実生	0	20	20



写真 左畝：「台パワーZ」、右畝：実生(11月)

圃場では8月に青枯病が発生し、9月調査時には実生で20%の株が青枯病に罹病したが、接木苗は両区とも1%にとどまった(表)。栽培終盤の11月の上旬には、実生苗は青枯病でほぼ全滅していたが、接木苗は安定して出荷できた(写真)。

実生は青枯病の発生により収量が5.0kg/株と低収量となったが、接木苗は「タッグマッチ」で7.7kg/株、「台パワーZ」で7.6kg/株と地域平年実生収量と同等程度収穫できた(図)。苗の金額は、実生苗118円/株、接ぎ木苗174円/株で、1株当たり56円高くなるが、減収の回避(2.7kg/株×300円/kg=810円/株)により、接木苗導入のメリットが確認できた。

今後の方針

今回の実証で、導入の効果を実感している農家事例を見て、接木苗の導入を検討する農家も増えている。今後は、初期収量が少ないという接木苗の欠点を補う施肥設計等の現地検証を重ね、収量アップにつなげていきたい。

森井 友也(豊岡農業改良普及センター)
(問い合わせ先 電話：0796-26-3708)

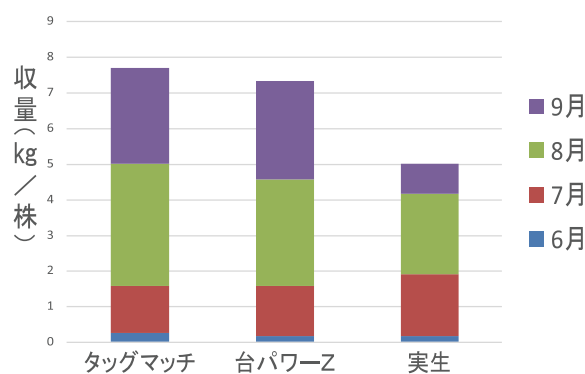


図 6月～9月の収量 (kg/株)